



京都大学こころの未来研究センター
上廣こころ学研究部門 2013 年度研究報告会
「生きることの価値」

2014 年 1 月 25 日(土)14:00~17:50

稲盛財団記念館 3 階大会議室

プログラム

•14:00 - 14:05 センター長挨拶

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授・センター長)

•14:05 - 14:15 来賓ご挨拶

丸山登氏(公益財団法人 上廣倫理財団 事務局長)

•14:15 - 14:30 上廣こころ学研究部門の紹介

カール・ベッカー(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

研究報告セッション①「生きることの価値とその揺らぎ」(14:30 - 16:00)

座長・コメンテーター

河合俊雄(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

•14:30 - 14:50 「現代社会における主体と価値の揺らぎ」

畑中千紘(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定助教)

•14:50 - 15:10 「病をめぐる自己の揺らぎ」

長谷川千紘(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定研究員)

•15:10 - 15:30 「認知症における家族介護者の価値の揺らぎ」

清家理(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定助教)

•15:30 - 16:00 パネルディスカッション

•16:00 - 16:15 -休憩-

研究報告セッション②「幸福感と伝統の価値」(16:15 - 17:45)

座長・コメンテーター

鎌田東二(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

•16:15 - 16:35 「身体の学びと伝統の価値の探究」

奥井遼(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定研究員)

•16:35 - 16:55 「GNH(国民総幸福)政策に見られる伝統の価値の探究」

熊谷誠慈(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定准教授)

•16:55 - 17:15 「脳科学による幸福感の探究」

阿部修士(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 特定准教授)

•17:15 - 17:45 パネルディスカッション

•17:45 - 17:50 閉会の挨拶

鎌田東二(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

研究報告セッション①

「生きることの価値とその揺らぎ」

座長・コメンテーター

河合俊雄(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

上廣こころ学研究部門・特定助教 畑中千紘

「現代社会における主体と価値の揺らぎ」

現在の日本社会には、「コミュニケーション力」や「つながり」、「絆」に大きな価値をみる傾向がある。昨今の若い世代が「コミュ力」という言葉を頻用し、一人でいることを極端に忌避することにも、現代社会において、これらの要素がいかに重要とされているかが反映されているであろう。このことに鑑みれば、2000年代以降に発達障害という概念が社会的な注目を集めてきたのも当然のことと思われる。発達障害の主要特徴は、「相互的社会性の障害」、「コミュニケーション能力の障害」、「想像力の障害」と一般に定義されている。すなわち、発達障害とはまさに現代社会が重視する方向とはまったく相反する特徴を備えた概念と考えられるのである。

それでは、発達障害の人の特徴とは、実際にはどのようなものなのであろうか。本報告では、発達障害の方の呈する特徴についてデータをもとに具体的に提示する。また、これを近年の大学生のデータや事例と比較しつつ、それが発達障害だけに特異的なものなのかについて検討したい。そして、特に近年になって発達障害が社会の「問題」とされるようになったことについて時代的な観点から検討すると共に、我々が生きる現代社会における「主体」の価値の変化について議論したい。

上廣こころ学研究部門・特定研究員 長谷川千紘
「病をめぐる自己の揺らぎ」

現在の医療現場では、身体の治療と並行して「こころのケア」の重要性に注目が集まっている。医療技術の進歩とともに治療方法や遺伝子診断など選択肢の可能性が広がり、「生きること」をめぐる問題はより複雑さを増している。こうした状況に身をおくとき、こころと身体は切り離せぬ問題としてひとり一人の前に立ち現れ、取り組まれてゆくことになる。昨今、こころの相談は精神科だけではなく小児科や内科などからも求められるようになり、身体に病を抱えたことをきっかけにカウンセリングに訪れる人が多くみられる。身体疾患のカウンセリングは、疾患に伴う副次的な問題を扱うにとどまらず、病を通して自分自身を深く見つめてゆく機会となるだろう。

本発表では、身体に病を抱える方々のニーズにあったこころのケアのあり方について具体的に考えていきたい。それは、主に心理的問題から来談される方々のカウンセリングとはどのような点で異なり、どのような配慮が必要なのだろうか。本報告では、代表的な内分泌・代謝系疾患である甲状腺疾患の方にご協力いただいた調査に基づきつつ、病をめぐるどのような心理的特性が示され、それに対してどのような援助が可能であるのかを検討したい。

上廣こころ学研究部門・特定助教 清家理

「認知症における家族介護者の価値の揺らぎ」

日本の認知症を持つ人は、増加の一途である。同時に、単なる家族介護者の疲弊のみならず、家族介護者との共倒れ死、認知症を持つ人に対する虐待、介護放棄、殺人等、倫理に反する悪循環が多発し、社会問題となっている。

依然として「家族による在宅介護が当然」とする、伝統的な介護倫理観を有する者が多いが、この倫理観を貫くことが難しくなっている。その結果、在宅介護に対する「義務感」と、介護を他者に委ねることに対する「罪悪感」の葛藤が生じる。特に、認知症を持つ人の家族介護者（以下、介護者）の場合、この傾向が顕著である。その背景には、1：認知症や治療に対する病識不足、2：（心理・行動症状の出現が予測不能な中での）介護による生活リズムの激変が挙げられる。つまり、家族介護者の介護倫理観は非常に揺らぎやすい状況にあり、苦悩や疲弊が増加していると考えられる。

以上により、介護者の苦悩や疲弊への予防策を講じることが急務である。そのためには、「どの」介護者が、「どのような」内容で、「どれだけ」苦悩や疲弊を有しているのか、的確に測定・把握する必要がある。これまで、介護者の負担を把握する指標として、Zarit 介護負担尺度が用いられてきた。しかし、認知症の特性、認知症介護特有の課題が反映されたものではなく、支援介入の目安になりうるものではなかった。まず本年度は、認知症を持つ人の家族介護者への聞き取り調査により、「既存尺度の限界の明確化」と「認知症に特化した新しい尺度の構成要素の抽出」に着手した。これらの作業を通じ、新しい尺度が開発された暁には、倫理に反する虐待や介護放棄等を予防する、認知症介護の新しいあり方が提案できるものとする。

研究報告セッション②

「幸福感と伝統の価値」

座長・コメンテーター

鎌田東二(こころの未来研究センター教授・上廣こころ学研究部門兼任)

上廣こころ学研究部門・特定研究員 奥井遼

「身体の学びと伝統の価値の探求」

本発表では、淡路人形座の活動の一端を取り上げ、「伝統」と「身体による学び」の関係を追求していく。淡路人形座とは、遅くとも16世紀中頃までに成立した人形芝居の座元を由来とする、いわゆる「伝統芸能」に従事する人形座である。

淡路人形座では近年、文化庁の「子どもの文化芸術体験事業」の一環で、日本各地の小中学校に出向いて人形浄瑠璃体験のワークショップを行っている。学校教育と伝統芸能は、必ずしも相性のよいものではないと考えられるが、あえて座員たちは、学校教育という枠組みの中で豊かなやり取りを仕掛けている。それは、定められた時間の枠組みの中での「授業」を求める学校に、異質な身体をもち込み、学校的な時間の秩序を創造的に破壊する試みでもある。また、座員たちは公演を「現代の巡業」として、今日の重要な取り組みの一つと位置づけており、「体験授業」を期待する学校側の思惑とは異なる次元で動いている。本発表では、学校教育という枠の中で、「教育的活動」を求められる座員たちが、いかなる仕掛けを用意し、子どもたちがいかなる応答を見せるのかを、座員と子どもたちとの身体的なやり取りに着目して記述していきたい。

「物は豊かだがこころが貧しい」と言われて久しい今日、教育現場には「こころの豊かさ」の再生が求められている。淡路人形座による試みは、伝統を通してこころの豊かさを育む上で、新たな可能性と課題を提起するものではないだろうか。

上廣こころ学研究部門・特定准教授 熊谷誠慈

「GNH（国民総幸福）政策に見られる伝統の価値の探求」

18 世紀中葉に始まった産業革命は、ヨーロッパを中心に急激な技術革新、経済成長をもたらした。しかし、経済成長を支えるべく乱開発が進んだことにより、地域的な公害のみならず、地球規模での環境危機さえ惹き起こすに至り、経済・開発至上主義の思潮に対する再検討が始まった。そうした動きの中で、国家の繁栄を追求する観点のみならず、社会の構成員たる個人が幸福を感じながら社会をいかに築き上げていくのか、という問題意識も芽生えはじめた。2012 年に国連で採択された「世界幸福デー」（3 月 20 日）も、まさにそうした関心の高まりの象徴であろう。

この「世界幸福デー」の採択には、ブータンという一国家が大きな影響を与えている。同国は GNH（国民総幸福, Gross National Happiness）という概念を提唱し、40 年にわたって国民の幸福度に重点を置いた施策を採ってきた。その結果、近年では、ブータン王国は「幸福先進国」として他国の幸福政策のモデルケースとなっている。しかし、GNH が論じられる際、政策的・行政的側面ばかりが注目を浴びているのは問題である。そもそも、ブータンの人々の言う「国民」や「幸福」とは一体いかなる価値基準に基づいているのであろうか。

本発表では、GNH の根底にあるブータン古来の思想や倫理観に焦点を当て、ブータンの人々が伝統的に培ってきた「幸福」という概念の本質をおさえたうえで、GNH およびその応用可能性について再考する。

上廣こころ学研究部門・特定准教授 阿部修士
「脳科学による幸福感の探求」

近年、幸福感についての研究が心理学・社会学・経済学などの分野で精力的に進められている。特に、どのような指標によって幸福度を測定するかについては、学術分野のみならず社会全体からの関心も非常に高い。社会の理想的状態を知るためには、個人の幸福を客観的に把握する必要があるため、適切な幸福度測定のための指標が必要となる。

幸福度を測定するための指標としては、比較文化のための「共通性」、国や文化の内実を踏まえた「独自性」、生物学的指標との関わりからの「妥当性」を有することが重要と考えられている。近年、日本文化の「独自性」に着目し、関係性・対人的幸福に焦点をあてた「協調的幸福感」に関する尺度が開発され、日本人の幸福感をよりの確に評価できる可能性が示唆されている。

本研究報告では、この協調的幸福感に関する尺度の「妥当性」について、神経科学的な観点からの予備的なデータを紹介する。40名の参加者から協調的幸福感の尺度と脳構造に関するデータを取得し、両者の関係について解析を行ったところ、幸福感が高い参加者ほど、報酬情報の処理に関わる眼窩前頭皮質のボリュームが少ないことが明らかとなった。この結果は、協調的幸福感と利己的な報酬追求の間に負の相関がある可能性を神経科学のレベルから示唆するものであり、協調的幸福感の尺度の生物学的な妥当性と今後の脳科学による幸福感研究の新たな方向性を示すものである。